

が *Vijayavāhana* 王の時代に於ける于闐に關係したものであることを推測せねばならぬ次第である。かゝれば此等の兩文書の言語は于闐の國語であつたことを充分に證明するものであつて、自分は之を *Kirste* 教授が推察した如く于闐語 (*khotani*) と稱するを當れりとするものである。而して此の國語は基督紀元以來引き續いて于闐の地で行はれたものであることを信ずる』

かくて此の出所不明で且つ不明の言語で記した文書を、美事に于闐國の域内から出たものであることを明らかにし、此の言語が于闐の日用語として唐代迄行はれたものであつたことを論定したのであるが、更に進むでこゝに記されたる *Visavavāham* = *Vijayavāhana* が、何時在位したものであるかを研究して、此の文書に見ゆる第十七年、第二十年の年代を定めやうと試みた。氏が此の爲に使用した資料は前述の西藏の文學中に見ゆる于闐王の名と主として漢書以下唐書に至る迄の支那正史の于闐に關した記載とであつて、順次兩者に見ゆる王名及び事績を比較して相一致せしむる方法とし、終に西藏の表に見ゆる *Vijayavāham* は唐書の伏闍囉(伏闍は尉遲と等しく *visa* の音)なるべしとの論結に達して居る。此の長い間に亘る兩記録のアイデンチフィケーションは、其の當否の穿鑿は暫らく措いて、頗ぶる興味に富んだ所であるが、こゝには悉く省略に従ふ。

最後に氏は此の種類の文書の中には、前に記した如く *Sali* (年) なる語によつて、日付けをせずに *ksāna* なる語を用いたもの、若しくは此等の兩者を併せ用いたものゝあることを注意し、而して此の *ksāna* なる語を解釋して、前の *Lévi* 氏の論文中に解く能はずとして残された *ksūm* の語に及んで居る。

『此の *ksāna* なる語は、庫車の近傍より見出さるゝ所謂 *B* 種のトカラ語なるもの、而して吾等が龜茲語と稱す